

## 米国のWSFに追いつき追いこせ

「何かお手伝いすることがあれば、何でも連絡してちょうだい」——米国WSFのオーチンクロスさんは、よく手紙でこういつてくる。事務局長の彼女は、組織を運営していくむずかしさや、事務業務の煩雑さを身にしみて感じているので、私の立場をよく理解してくれているのだ。

米国のWSFは非営利(non-profit)の団体である。日本式にいうと、財団法人のようなもので、いわゆる一般の会社とは異なり、利益を追求しない団体で、税法上の優遇措置を受けている。

私たちも、そんな形態を目指しているのだが、なにせ先立つ資金が少ない。現在、ある組織が財団法人として認めてもらうには、1千万もの金がかかるという。どうでもいい法人団体ばかり増えている気もする。スポーツ関係の法人団体では、かつての有名選手が、私腹を肥やすためにそういうものを作ったという話も聞く。わけのわからない法人団体を足場に、ポロもうけしている体協関係者もいるようだ。

そんなくだらない団体に資格を与えるより、このWSF Japanを認めてもらった方が、どれだけ社会のためになるか知れない。とはいっても、そう考えるのはこちらの勝手に、社会がそう簡単には認めてくれるほど、現実には甘くない。

日本では、本来のボランティア活動は育ちにくいといわれている。また一方では、女性の組織作りはなかなか成功しないものだともいわれている。WSF Japanは、ボランティアで、しかも女性主体(男性会員もいるが)の組織。さらに、アマチュアもプロもいっしょくたで、研究者や企業の人まで含まれている。これでまとめようというのだから、通常の組織の2倍3倍の困難があることは、当然といえる。

米国の場合、WSFのオフィスには、学生がボランティアとして事務を手伝っている。また、有名選手やトップの指導者の協力体制が、日本以上に整っている。

米国では、スポーツ選手に限らず、名をなした人は積極的にボランティア活動にかかわっている。売名行為と受けとる人も中にはいるようだが、概して社会にお返しをする素直な姿勢が見られる。その動機について、ある米国人は「宗教的な見地からだ」という。企業にしても、利益の社会還元については日本より積極的なような気がする。

たしかに日本でも、大企業が〇〇財団という組織を作って、あまり陽の当たらない分野に資金を提供しているが、なぜか税金対策の色が濃い。どうも、不純な

動機が見えかくれして、純粋な社会還元と受けとりにくいケースが多いのである。

WSF Japanの活動も、2年目にはいった。1年目は今の日本の女性スポーツがどんな状況にあるのかそれを認識した時期だった。今年は、団体会員の加入で数の上で大いにパワーアップしている。(会員13000)企業に対しては社会環元を訴えつつ、そして、未加入の女性たちには、スポーツ界での女性の地位向上を訴えつつ、地道に組織作りをしていきたいと思う。

WSF Japan 代表・三ツ谷洋子

### WSF Japan 57年度の活動

- |          |   |
|----------|---|
| 57年1月30日 | WSF Japan 発足記念パーティー<br>(目黒・国民年金中央会館)  |
| 4月1日     | WSF Japan News 創刊号発行  |
| 4月17日    | 第1回勉強会「各国の女性スポーツ事情」(日本スポーツマンクラブ)<br>(講師)清和洋子・中大講師=「ポーランドの女性スポーツ」小田多江子・テニスコーチ=「米国の女性スポーツ」萩原美代子・文化女子大講師=「英国の女性スポーツ」について |
| 7月1日     | WSF Japan News 第2号発行  |
| 7月24日    | 第2回勉強会「女性スポーツ団体の歩みと今後の方向」(日本スポーツマンクラブ)<br>(報告者)加藤妃生子(日本家庭婦人卓球連盟会長)宮下恭子(日本OG軟式庭球連盟事務局長)森るり子(神奈川県女子サッカー協会)第1回総会         |
| 10月1日    | WSF Japan News 第3号発行  |
| 10月30日   | 第3回勉強会「ジャーナリズムの中の女性スポーツ」(日本スポーツマンクラブ)<br>(講師)三ツ谷洋子(スポーツジャーナリスト)   |
| 58年1月15日 | WSF Japan News 第4号発行  |
| 2月1日     | 創立1周年記念シンポジウム(西武百貨店池袋店スタジオ200)第2回総会   |
| 〃        | 〃   |